

(53)0805 ニュージーランド印象記 051505 締め切り 050105 提出

住みやすいと評判

2005年の3月の末、妻と2人で豊かな自然が残っているとされるニュージーランドを旅行しました。夏の終わりで、木々の葉が少し黄色味をつけ始めていましたが、場所と日によっては短パン・Tシャツで過ごせる気候でした。地図で見ると、オーストラリアの右下に位置し、成田から北島のオークランド Aucklandまで直行便で10時間余の距離にあります。南半球ですから太陽が右から左へ向かって移動していましたが、これは前々年フィジーへ行ったときにすでに経験済みでした。結論をいえば、自然の雄大さと豊かさとは圧倒され、大満足の2週間でした。住んでいる人間も大らかで、何をいっても、「ああ、いいよ」の感じで、外国からの移住者が多いのですが、尋ねる人は皆「住み易い」の返事で、

共感できました。住みついている日本人も飲食店・土産物屋の店員からローカル線の飛行機の操縦士までたくさん見ましたが、皆楽しそうでした。昔、とくに南米への日本政府主導による移住は結果的に棄民政策などと酷評されましたが、ニュージーランドへの移住は国民の棄国思想によるのではないかとさえ考えられ、ちょっと心配になりました。

自然が雄大なクイーンズタウン周辺

オークランドからは南島のクイーンズタウン Queenstown へ飛びました。キャプテン・クックが女王様にお見せしたいとかいったという山と湖のある風光明媚なところでした。ところで、地図を見ていたらKingstownという地名のところが見つかりました。小さな町のようにですが、女王様の国ではQueestownが大きくて、Kingstownは小さいのかと勝手に納得してレンタカーで行ってみると、Kingstoneでした。地図の小さい字を読み誤ったのでした。

クイーンズタウンから小型飛行機で45分ほど飛ぶと人気のミルフォードサウンド Milford Sound へ行けます。北欧のフィヨルドと似た地形でした。バスでは、山また山の道を片道5時間ぐらいかかるそうです。ガイド付きで、途中何泊かしながら山越えするツアーもあり、以前からやってみたいなぁと思いながら、ついつい年をとってしまい、あきらめたのでした。飛行機から見たところでは、手付かずの自然の山林が次から次へと重なっているようでした。

47 c m の ブラウン ト ラウト は フランス 料理 に

クイーンズタウンにいる間に、モーターボートで湖へ釣りに出かけました。そこで47センチの魚を釣り上げたのです。30センチ以下だと、小さいからとりリリース（放す）するのです。「brown trout だから旨いぞ」と言われたのですが、体側に朱色の斑点があり、もしかしたら岩魚（イワナ）の仲間かもしれませぬ。

岩魚だとすると、日本では幻の大物というところでしょう。早速、前々夜食へに行ったフランスレストランへ持ち込みました。私は、料理の名前は知らないのですが、シェフを呼んで「腹に砕いたナッツと野菜とハーブを詰めて、皮が茶色になるまでよく焼いて」と頼みました。あとで、妻と2人で丸焼き1匹を平らげました。大変おいしく、自然の恵みに感謝の食事でした。近頃、日本でもニュージーランド産のワインが出回っていますが、どこでも美味しく・安いワインが飲めて満足・満足でした。

レンタカーで移動もしましたが、アメリカや日本のような片側2車線・3車線といった高速道路は見ませんでした。地図上の一級道路でも、片側1車線の道路でした。都会の中央部を除いて交通渋滞はなく、これでよいのかも知れませんが、郊外に出ると皆時速100キロ～120キロで走るのちょっと恐ろしい感じがしました。しかし、

カーブがあると必ず道路の外側は上がっていて走り易く、よくできていると思いました。

雷まじりの悪天候のため飛行機で目的地へ直行できず、迂回し、あげくの果てに100キロ以上も離れた別の飛行場に降ろされたりもしましたが、飛行機会社が車で送ってくれ、自動車道路網より飛行機路線網を重視しているとも考えられました。そういえば、東京女子医科大学の時代の若い女性の患者が、ニュージーランドへヘリコプター操縦士の免許を取りに留学するといっていました。きっと、取りやすい状況にあるのでしょう。

アメリカ婦人に気功を

南島で1週間過ごし、北島のロトルア Rotorua 湖へ移動しました。ここの小さなリゾートホテルでは、夕食は6組の夫婦がそろって摂るのです。米国から来た人が多かったのですが、話のついでが外気功のことになり、2人のご婦人に体験もさせてあげました。

「気持ちが楽になった」「肩こりが取れた」と大喜びで、「気持ちがいいので、自分たちと一緒に旅行して毎晩気功をしてほしい」といわれました。翌朝、1人のご主人には、「ワイフが生まれ変わった」と感謝されました。この土地の周辺では、Whakarewarewa・Tarewera・Waitomo などハワイなどで聞く言葉に似た地名が多くあるのに気が付きました。恐らく、先住民族マリオ由来の地名ですから、大洋州の海洋民族の活動範囲はとてつもなく広いものです。どんな船で往来したのでしょうか。

50 c m 超の鯛は中華料理に

アイランズ湾 Bay of Islands では、また釣りに出かけました。今度は海釣りでした。ここでも大漁でしたが、結局、50センチ超のマダイと30センチ超のオコゼの仲間を持ち帰りました。今度は、中華料理屋へ持ち込み、香港から移住してきたという中国人のご主人と相談

して、タイの半身はフライにし、骨のついた半身はそのまま唐揚げ、オコゼは丸ごと煮てもらいました。思い入れもあってどれもこれもおいしかったのですが、さすがに2人では食べきれずに残してしまいました。しかし、デザートは別腹で、アイスクリームのフライは全部平らげました。請求書を見ると、魚の料理代が1品当たり日本円で800円位なのです。これも気にいって、「このChineseは今まで食べた世界中で最高においしかった」とお世辞をいってきました。米国本土・アラスカ・カナダでも釣りをしましたが、たまたまかもしれませんが、ニュージーランドの方が確実に釣りを楽しめる感じでした。

どこへ行っても自然が豊かで風光明媚・壮大で、陸が広く・空が広く、北海道でも見られないような大地が延々と連なっていました。ついつい絵が描きたくなり、自己流の水彩画を6枚仕上げました。

## 活気のあるオークランド

最後にオークランドに泊まりましたが、この町はもの凄く活気のある町でした。オークランド大学がダウンタウンに近いせいも、若い人たちがガンガンというように動き回っていました。キャンパスをのぞいてみると、ざっと9割以上は出生地がさまざまと考えられる東洋人でした。ちょうど、この原稿を書いている時期に、サミュエル・ハンチントンの「分断されるアメリカ（集英社刊）」を読んでいるのですが、知識階級にアメリカ人としての共通のアイデンティティーがなくなっていることが指摘されています。若いときに、さまざまな価値観を持った人たちと生活し、話をしていると、自分の出生地に根ざした共通のアイデンティティーが希薄なものになることは十分に理解できるような気がしました。

挿絵：ワカティプ湖のフランクトン入り江  
このワカティプ湖のほとりにクイーンズタウン



ンがあります。47 c mのブラウントラウトが釣れた入江です。町のこんなに近いところで大きな魚が釣れるのは、周辺の自然の豊かさを示すことなのでしょう。